

古代秋田城跡における築地塀の構築について*

Structure of the Earthen Wall of Ancient Akita Castle Site

日野 久**

By Hisashi HINO

概 要

古代律令国家が東北地方の日本海側の経営拠点として設置した出羽柵は天平5年(733)に秋田村高清水岡に100km北進し、移遷された。その後、天平宝字4年(760)頃に出羽柵は秋田城と改称され、10世紀の中頃まで存続し、古代出羽国の政治・経済・軍事・文化の中心地であった。

昭和47年(1972)、秋田市教育委員会は現地に調査事務所を設置、継続して発掘調査を実施し、古代秋田城の実態が次第に明らかになってきている。

本小論はその調査成果から、外郭・政庁を区画していた築地塀の規模・構造・構築方法について述べるものである。

1. 古代秋田城の沿革

『続日本紀』天平5年(733)12月条に「出羽柵を秋田村高清水岡に遷し置く」と記録されている出羽柵は和銅7年(709)にすでに、史料にあらわれている。現在の山形県酒田市周辺、庄内平野に所在したと考えられるが、遺跡の場所は明確になっていない。

約100km北進し、現秋田市寺内地区の高清水丘陵に移った出羽柵はやがて秋田城と改称されているが、天平宝字4年(760)の文書に阿支太城(あぎたじょう)と表記されている(『大日本古文書』)。このことはまた、『日本後紀』延暦23年(804)の記録に「秋田城建置以来四十余年」とあり、逆算すると、ちょうど760年頃となることから裏付けられる。

このようにして成立し、改称された秋田城の古代律令国家における役割は、当時、蝦夷(えみし)と

呼称されていた人々の住む辺境地の支配と、大陸の朝鮮半島の北から沿海州かけて存在していた渤海国や北海道を含む北方地域との交易の拠点として機能することにあったと考えられる。

その後、主な事件として『類聚国史』に秋田城下で、天長7年(840)大地震が発生、城郭、四天王寺の建物と丈六の仏像が倒壊し甚大な被害が出たこと、また、元慶2年(878)夷俘が反乱し、官舎161宇、城櫓28宇、城棚櫓27基、郭棚櫓61基が焼失し、甲冑300領、米糲700石、衾1,000條、馬1,500疋が奪われたことが記されている(『三代実録』)。

天慶2年(939)再度、俘囚の反乱が城下に発生、長保2年(1000)秋田城造立の官符が下されている。

中世に至っても『吾妻鏡』に文治6年(1190)「秋田城」の記述が、また、「秋田城介」の官職名が中世全般を通じて散見できるが、その実態は明確でない。遺構・遺物から秋田城の存続を確認できるのは、10世紀中頃までである。

* keywords: 古代 秋田城跡 築地塀

** 非会員 秋田市教育委員会

(〒011 秋田市寺内字大畑111)

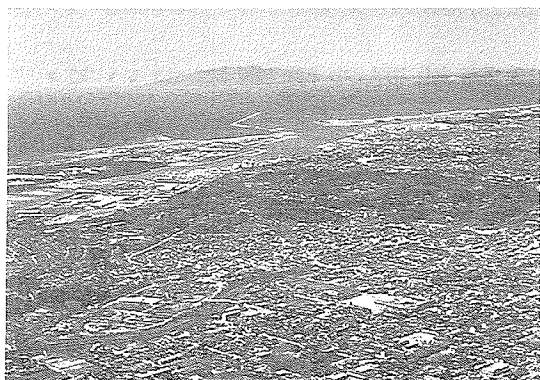


写真-1 高清水丘陵全景 1979 前から

2. 秋田城跡の立地と調査の概要

秋田市の中央部西端、日本海を望む標高40～50mの独立丘陵、通称「高清水の丘」の上に秋田城跡は立地している。丘陵の西端をかすめるように県内最大の河川・雄物川の旧河道（現秋田運河）が北流し、2kmほどで秋田港に至る。秋田港は以前は

土崎湊であり、中世以来、「湊」・「秋田湊」と呼ばれ「地味式」にみえる三津七湊の一つに数えられ、北前船の寄港地でもあった。

高清水丘陵の北部から西部にかけては基盤の粘土層（寺内層）上に飛砂が厚く堆積し、古代秋田城の遺構はこの上に構築されている。また、名称のとおり、丘陵のいたるところで良質の湧水が認められる。

現在、秋田城跡は国指定の史跡となっており、指定面積は約90ha、丘陵のほとんどがこの範囲に入っている。

発掘調査は昭和47年（1972）、秋田市教育委員会が宅地造成などの開発行為から史跡を保護すべく、その基礎資料を得るため、現地に調査事務所を設置し、現在もなお継続して実施している。

調査成果の概要は以下のとおりである。

- ・天平6年（734）の木簡が出土したことから出羽柵の秋田村高清水岡移遷が裏付けられた。
- ・秋田城は外郭と政庁の二重の区画施設で構成され

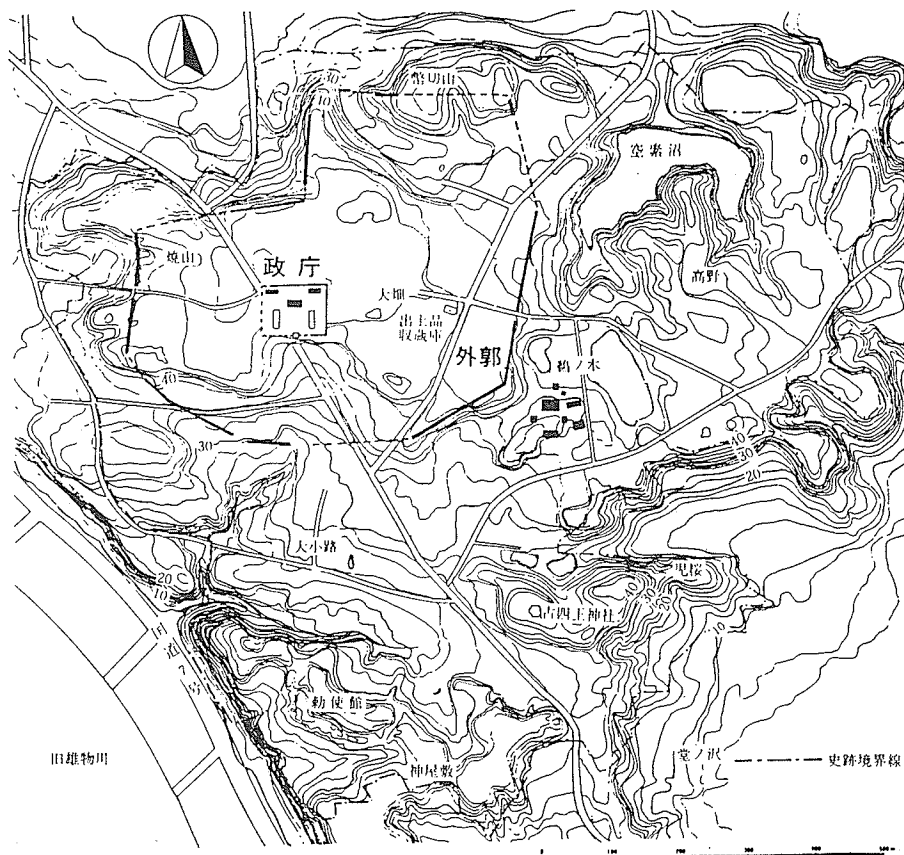


図-1 秋田城跡 地形図

ている。

- ・外郭の外にも計画的に配置された大規模な建物群が鶴ノ木地区に存在する。
- ・出土した木簡、漆紙文書等の文字資料から、行政的な機能をもつ地方官衙であったと考えられる。
- ・出土遺物から終焉は10世紀中頃と考えられ、中世には外郭、政庁ともその機能を停止している。

3. 外郭

外郭は丘陵上という地形的制約から、東西約550m、南北約550mの不正方形を呈する。古代の1町が約109mであることから、5町四方に丘陵の平坦部を囲み込むことを意図していたものの、地形上、北西部が欠ける形態となったものと考えられる。

外郭の変遷は大きく4時期に分かれており、Ⅰ期は基底幅2.1m(7尺)の築地塀で瓦葺きである。高さは『延喜式』木工寮築垣条によって復元すれば4.5mを越すものとなる。遺存状況の良好な外郭西辺の調査では2mを越す高さで遺存していた。

築地塀は土止めなどの構築物もなく、直接に地山の飛砂上に粘土と砂を交互に積み上げ、叩き締める



写真-2 外郭西辺築地塀と崩壊瓦 1974



写真-3 外郭西辺築地塀土層断面 1974

「版築」技法で作られており、緻密なところでは1枚の層の厚さが数mmという状態で観察される。

積み上は長さ約3m(10尺)で積み手の違いが認められ、この単位で次々に延長されていったものと考えられる。

基底部の積み土を挟んだ対称位置に柱穴が確認されている。積み土から僅かに離れた位置であることから、屋根を支える須柱(寄柱)ではなく、版築の際のセキ板を支える工事用の柱穴と考えられる。

築地塀に使用する粘土は内側の隣接地から採掘されており、外郭東辺の調査では長径2.5m、短径1.5m、深さ7mの土取り穴を検出している。内部からは採掘に使用した鋤が廃棄された状態で出土した。

Ⅱ期の外郭はⅠ期の築地塀を修復・嵩上げしておりに規模は変わりが無いが、瓦の出土がないことから屋根は板葺きのようなものであったと推定される。

Ⅲ・Ⅳ期は布掘り溝を伴う材木塀で構築されており、眺望のきく要所には1×2間の櫓状の建物が取り付けられている。

外郭の各時期の年代はⅠ期が、その崩壊瓦上層から天平宝字3年(759)の紀年のある漆紙文書が出土しており、それ以前に崩壊していたことが判る。構築年代は天平5年(733)、出羽柵の秋田村高清水岡移遷時に求められる。

Ⅱ期は出羽柵が秋田城と改称される天平宝字4年(760)頃に構築されたものと考えられる。この時期は中央で、藤原仲麻呂の活躍した時期であり、その子、朝狐が東北の城柵の整備、充実を図った時期である。

外郭の構造が築地塀から材木塀に大きく変化した

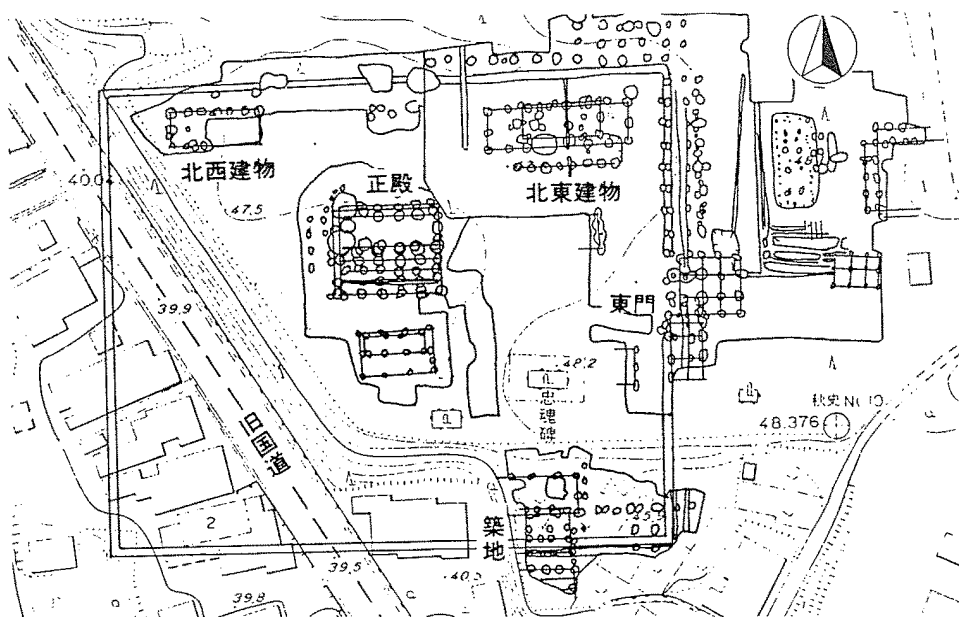


図-2 秋田城跡 政庁遺構配置図

時期はⅢ期であり、その構築は出土した木簡の紀年から延暦14年(795)以降、しかも、この時期を大きく降らない、8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

Ⅳ期は同時期の建物が元慶2年(878)の大乱による焼土層を掘り込んで構築されていることから、この乱以降の構築である。

外郭に伴う門については、確認されているのは東門だけである。Ⅲ・Ⅳ期に伴うもので、掘立柱式の八脚門の構造である。Ⅰ・Ⅱ期のものはⅢ期の門の直径3mの柱掘り方によって壊されている。

秋田市はこの外郭東門と築地塀の南北45mを平成6～9年度で復元事業を実施している。

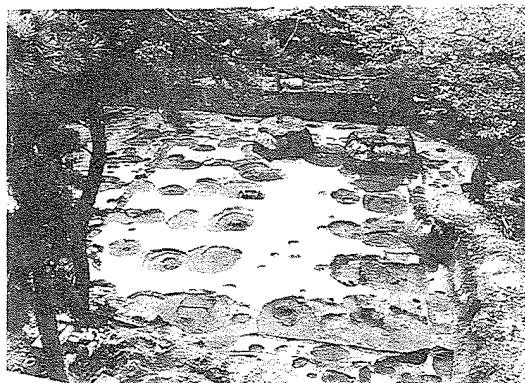


写真-4 政庁 正殿跡 1984 秋から

4. 政庁

政庁はその中心建物である正殿と区画施設の変遷から6時期の変遷がある。

Ⅰ期は基底幅1.2m(4尺)の築地塀で屋根は瓦葺き、高さは前述の『延喜式』によれば、2.5mに復元される。築地塀で囲まれる範囲は東西約9.4m、南北約7.7mで東西方向に長い、城柵遺跡の政庁には特異な、横長の形態となっている。これは政庁東南部を整地造成して平坦部を確保していることから、地形的な制約によるものと考えられる。

築地塀の積み土の版築は外郭のそれより粗い状態であるが、地山の飛砂に直接に積み上げる方法と工事用の柱穴の状態は同様である。

Ⅱ期は政庁の北半が築地塀、南半が材木塀となり外郭Ⅱ期と同様に瓦葺きでなくなる。

Ⅲ・Ⅳ期は掘立柱を連結し遮蔽する掘立柱塀である。

Ⅴ・Ⅵ期は材木塀の構造である。

政庁正殿は区画施設に対応して、ほぼ同位置で6回の変遷がある。Ⅰ・Ⅱ期が梁間3間であることとⅥ期が礎石式出ること以外、全て梁間2間、桁行5間で南庇の付く掘立柱建物である。Ⅳ期の正殿は焼失しており、白壁であったことが判明している。

各期の年代はⅠ期が8世紀前半の構築、Ⅱ期が8

世紀後半に崩壊、Ⅲ期は8世紀末から9世紀前半の構築Ⅳ期は元慶2年(878)の焼失・崩壊しており、Ⅴ・Ⅵ期はこれ以降の構築である。

5. おわりに

古代秋田城跡の構造は基本的に外郭・政庁という二重の区画施設を創建時から終末期まで踏襲するという、東北地方全般の古代城柵との共通性を有している。ただ、他の城柵の多くが創建から終末まで同一の区画施設の構造であるのに、秋田城跡では築地塀から材木塀に大きく変化しているという特質が認められる。

この特質は、秋田県内の同時期の城柵である払田柵跡でも、部分的ではあるものの認められる。

築地塀が雪国である秋田地方に構造的に不適であったことがその大きな原因のひとつと考えられるが、容易に入手可能な豊富な木材の存在と、伐採技術の向上などが大きく影響したことも否めない。

おわりに東北地方で復元している築地塀が構築して1年で凍害で崩れてきているということと、古代秋田城跡の築地塀が長くて40年、短い場合30年足らずで崩壊しているのに、材木塀は70年以上、存続している事実を述べてまとめに代えたい。

(参考文献)

- 1) 秋田市教育委員会：『秋田城跡調査概報』
1972～1995
- 2) 秋田市教育委員会：『秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅰ』 1984
- 3) 秋田市教育委員会：『秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅱ』 1992
- 4) 秋田県教育委員会：『払田柵跡Ⅰ－政庁跡』
1985
- 5) 秋田県教育委員会：『払田柵跡調査概報』
1974～1994
- 6) 秋田城を語る友の会：『史跡秋田城跡』
1993
- 7) 新野直吉：『古代日本と北の海みち』
高科書店 1994
- 8) 新野直吉：『田村麻呂と阿弖流為－古代国家と東北』 吉川弘文館 1994
- 9) 日本考古学協会：『北からの視点』宮城・仙台大会シンポジウム資料 1991

表－1 秋田城関係主要年表

西 暦	和 暦	事 項
733	天 平 5 年	出羽柵を遷して秋田村高清水岡に置く。
758	天平宝字2年	桃生城(宮城県)、小勝柵(雄勝)を造らせる。
760	" 4 年	阿支太城(秋田城)が初めて史料にみえる。
780	宝 亀 11 年	出羽国鎮狄將軍安倍家麻呂秋田城の棄守につき指示を求める。
794	延 暦 13 年	平安京に遷都(京都)。
804	延 暦 23 年	秋田城を停めて郡となす。
830	天 長 7 年	秋田地方大地震、城郭、四天王寺等の建物と丈六の仏像が倒壊。
878	元 慶 2 年	夷俘反乱して秋田城を襲う(元慶の乱)。この乱による官軍の損害は、官舎161宇、城柵28宇、城柵櫓61宇、馬の損害1500匹とある。
939	天 慶 2 年	出羽国の倭囚反乱。
1051	永 承 6 年	前九年の役(陸奥守源頼義、安倍頼良を討つ)。
1083	永 保 3 年	後三年の役おこる。